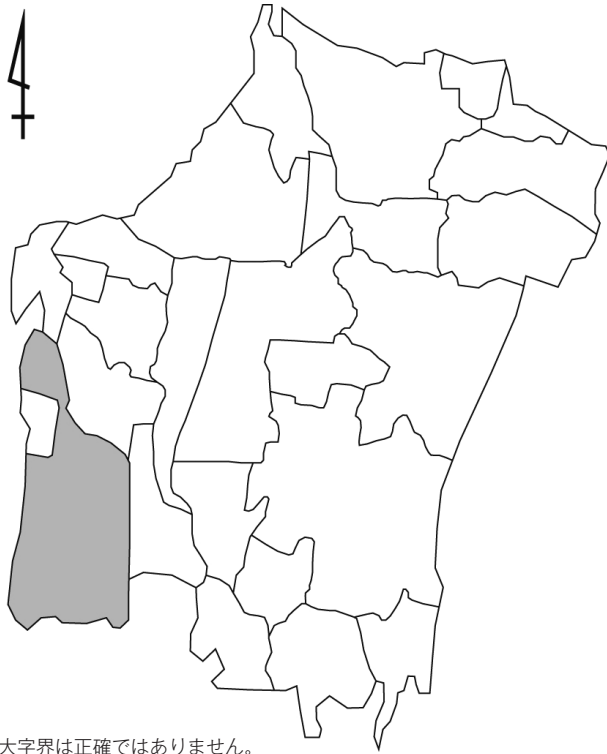


郷土かみのかわの歴史・文化財

上三川の地域と歴史 多功

多功は、町域の南西部、田村名で、田劫村とも呼ばれて川右岸の台地上に位置しています。北側は鞘堂と大山、東側は梁、西側と南側は下野市と接しています。

近世の始めは宇都宮藩領、その後は旗本領、幕府領、下総関宿藩領（現在の千葉県野田市）を経て、幕末へと至ります。多功は明治時代までの



※大字界は正確ではありません。

が宿泊するための本陣もありました。現在でも街道沿いは当時の面影が垣間見られます。

さて、多功の地名の由来は、平安時代にまで遡ります。延喜5(905)年に編纂された『延喜式』には当時あった宿駅の名称が記載されており、その中に「下野国田部郡」と記されています。ここに記された「田部」は「田郡」の誤表記であり、これを多功の地名の由来とする説です。

実際に、近隣から当時の河内郡衙関連施設と推定される多功遺跡(天神町)や大規模な集落である多功南原遺跡(字南原)などの遺跡が発見されています。

それから時を経た鎌倉時代の宝治2(1248)年、宇都宮家5代当主頼綱の四男宗朝はこの地に多功城を築き、自身は多功氏を名乗りました。多功の地は、上三川城同様に宇都宮氏の領土南端の守りの要として重要な地でした。

多功城は、慶長2(1597)年に落城するまで約350年間に渡り、小山氏との雌雄を決した裳原の合戦(1380)や上杉謙信の軍勢を敗

走させた多功ヶ原の合戦(1558)など数多くの戦いに関わりました。

多功城域には多くの寺院があったといわれますが、現在まで残っている寺院は宝光院・西念寺・見性寺のみです。また、地区の鎮守として星宮神社が鎮座しています。

下多功公民館の東側、旧鎌倉街道沿いには、多功不動尊があります。昭和10年代、エアバッグ考案者として知られる多功出身の小堀保三郎氏が、

中心となって現在のように整備しました。かつて、小堀邸に版画家の棟方志功が逗留した際には、境内の榎木の太木を描き、「歡喜木」と命名したそうです。

古代から続く街道沿いの宿場・多功の地。歴史の痕跡を歩いてみませんか。



きれいに整備された多功不動尊